

基礎と感性

書との出会いは、三歳の頃です。書道の先生だった母から、習字を習ったことがきっかけでした。習字のけいこは、師である母の字を手本にして書くのですが、普段はやさしい母が、書のことになると急に厳しくなったのを覚えています。例えば、ひらがなの「た」を書こうとしたとき、「入り方がダメ。スピードが速すぎる。止め方がなっていない。払い方が雑」などと、四画しかない「た」に対して、一画目から十数回もダメ出しされるのです。ほかの字も一画一画すべてボロカスに言われながら、ミリ単位で徹底的に基礎をたたき込まれました。単に字をまねるだけでなく、母の字をとことん見て、筆の入り方や払い方などを分析

だからです。海水や山水、雨水が循環して蛇口を通して自分の手のひらに注がれ、顔の汚れを取りながら温度を下げつつ目を覚ます行為は、地球の滴で顔を洗っていることにはかなりません。このように、物事を最大限に味わうことができれば、何気ない日常のすべてが奇跡と感動の連続であることに気付かされます。

そんな両親に育てられたおかげで、きれいに整った字を書くために必要な書の基礎と、人に感動を与える書道家の感性が養われたのだと思います。

これが、書道家「武田双雲」の原点です。

言葉はブーメラン

書の創作活動以外に、私は十年前から書道教室を開いています。今では、小学生か

し、字の雰囲気をつかみ取る努力をしました。そうして、母から合格点をもらったときは、天に昇るほどうれしかったです。

父は、「毎日が感動の連続」というくらいに感動屋です。食事のたびに、「こんなうまいもん、食べたことなかー！」と言って、箸を落とす。「見てみる、今日の夕日すごかー！」と叫びながら家に帰って来て、家族を連れて夕日を見に行き、涙を流す。まるで漫画みたいな話ですが、どれも日常的に行われていました(笑)。父は、いま目の前にあるものを最大限に味わうことができる人です。そんな父の背中を見て育った私は、その影響を強く受けました。

例えば、毎朝顔を洗うとき、蛇口から水が出ることにすごく感動します。なぜなら、蛇口から出る水の元をたどれば、地球の滴

ら八十代のお年寄りまで、三百人以上の生徒さんが来てくださっています。

この教室は、書道を通して「自分の可能性に気付いてもらいたい」という思いで開いています。その方法の一つとして、単に字の練習をするだけでなく、テーマを決めているような質問に対して書で答えるという工夫をしています。

ある日のテーマは、「生き方を見つめる」。私が「今日起きてから今まで感謝できることを十個書きましょう」という質問をしたとします。これに答えるため、脳は朝からの自分の行動を思い返し、その中で何に感謝できるかを見つげるためにフル回転します。すると、朝起きてカーテンを開けたときの太陽の日差しが暖かったこと、春風のさわやかさ、電車の中でお年寄りに席を